

乾彰夫先生を送る

荒井 文昭

乾彰夫先生が、2015年3月で定年退職を迎えられる。

この送ることばでは、青年期教育の研究に一貫して取り組んでこられた乾彰夫先生に尊敬の意を込めて、あえて乾さんと呼ばせていただきたい。

教育現場と向き合い続ける仕事

乾さんは、1995年から東京都立大学に着任して以来、国内外で、教育（特に高校教育）の現場に向き合い続けてこられた。院生や学生とともに、高校をはじめとするさまざまな教育現場に行き、話を聞き、ゼミで議論を重ねてこられた。乾さんの仕事は、常に実践がおこなわれる現場と対話しながらおこなわれてきた（詳しくは、研究歴を参照されたい）。

その教育現場は当然のことながら、社会のあり方、特に青年期の教育においては労働市場のあり方と関係している。そのために、乾さんの対象とした研究領域は、高校教育の実践、教育政策分析だけではなく、労働市場に対する調査研究に国内外で取り組まれており、その研究と実践の範囲は広く、また深い。そのため、この小文に乾さんの仕事全体について書き込むことは到底できそうにない。

そこでここでは、青年期教育研究者としての乾さんから、わたしなりに学んだことのいくつかを記すことによって、送る言葉とさせていただきます。

乾さんが、最初にまとめた研究書としての著作は、1990年に出版された『日本の教育と企業社会』である。そして2006年からは、高校卒業者に対する共同追跡調査を土台にしながら、その成果を次々に発表されている（なお、1986年に単著として出版された『自立に向かう旅』は、研究書としてではなく高校生に向けて書かれた形式となつてはいるが、その内容の一部を長年わたしは、戦後日本における社会変動と教育政策の変遷を扱う授業で使わせていただいき

た。またこれと同様な著作としては、2012年に単著として出版された『若者が働きはじめるとき』も、高校卒業者を含む若者に向けて書かれたものではあるが、その内容は研究を土台にした記述となっており、平易なことばで書かれてはいるが、研究的にも重い問いかけが含まれている)。

この小文ではまず、『日本の教育と企業社会』から学んだことを記し、つぎに2006年以降の一連の仕事から考えさせられたことについてふれてみたい。

企業社会と教育の関係を分析する視点

「経済審 63 年答申が描いたそれは、(中略) 個々の職種や職務にのみ対応した限定的で具体的な、それゆえ容易に客観化が可能な能力であった。したがって、その評価尺度は職種・職能ごとに多面的であり、そこから描かれる能力主義像も多面的なものであった。しかし、『職務遂行能力』原理の能力像は、現時点での職務に対応した能力ばかりでなく、『潜在的能力』など非限定的で客観化不能なものまでも含み込んだ、いわば『人的素材』としての『能力』をその評価の対象にした。そのため、評価尺度は一元化し、いわば『人間評価』そのものに近いものとなった。したがってそこでは、能力主義競争も一元的なものとならざるをえなかった」(136 頁)。

少し長い引用となってしまったが、これは『日本の教育と企業社会——一元的能力主義と現代の教育＝社会構造』(1990 年、大月書店)からの引用である。この著作の中で乾さんは、戦後日本における労働市場政策の分析から 1963 年経済審議会答申が変容されていく過程を分析することによって、青年期教育の課題を提起した。とくに、1969 年の日本経営者団体連盟(日経連)がまとめた『能力主義管理—その理論と実践—』に着目し、その内容が当初めざされていた「職能」にもとづく多面的な能力主義ではなく、「職務遂行能力」を評価する一元的な能力主義に修正された痕跡が残されていることを、この『能力主義管理』の本論に付属してつけられていた、関係者による座談会を分析することによって明らかにしたのである(なお、新装版として 2001 年に出版されたものからは、初版に掲載されていたこの座談会は削除されている)。

乾さんはこの著作で、職務から職能を中心にした日本の能力主義人事管理システムへの転換がおこったことを示すことによって、日本における学力競争も一元的なものとなっていった背景を追求したのである（この乾さんの研究から示唆を得て、わたし自身は、教育管理職人事行政の研究に向かっていくヒントを得ることができた。すなわち、評価者による裁量を不透明な形で維持させることによって、政治的な権力関係を人事評価システムのなかに維持させようとしたものとして、この職務から職能への能力評価転換をとらえたのである）。

教育学研究者としての乾彰夫さんの立ち位置

「矛盾をはらんだ教育現実の中に教育的価値を定位してゆくことは教育学の任務である」（207 頁）というのも、『日本の教育と企業社会』で乾さんが書かれたことばである。

わたし自身、このことばに共感し励まされながら研究を追求しようとしている一人である。現実を無視するのではなく、かといって現実に合わせてだけでなく、矛盾をはらんだ現実の中に教育的価値を追求していくことを、教育学の課題としていくことが必要なのだという、こうした、教育学固有の課題を追求していこうとされてきた乾さんの立ち位置は、一方で現実を無視して教育を語る動向がうまれ、他方で現実にあわせて教育を描く傾向がひろがるなかで、今後も引き継がれるべきものであるとわたしはとらえている。

この、「教育的価値」を教育現実のなかに定位していく課題を乾さんは、勝田守一を引用しながら提起していた。すなわち、人間の成長を「自分の未確定の可能性の中から選択する」とこととしてとらえ、勝田が 1950 年代から 60 年代にかけての教育政策動向に対して「特殊化のもつ教育的非価値性」を問題としたことに対比させて、乾さんは逆に、「抽象化のもつ教育的非価値性」をこそ、これから青年期教育が課題として取り上げなければならないものとして提起したのである。

実際、「学習の抽象化は、『自分を未確定の可能性の中から選択する』という主体的選択の契機を欠いたまま、自らをまさに『未確定』なままの労働力とし

て企業社会にゆだねることとなった」(同書 213 頁)という指摘は、リアルなものであったと言えるであろう。

乾さんの課題提起は、したがって、「職業準備の抽象化に対して、どのように『自分を未確定の可能性の中から選択する』主体的契機を育てるか」として、職業教育のあり方に焦点化されて提起されたわけであるが(同書 214-215 頁)、そこにとどまるものでもなかった。すなわち、『『自分を選択する』』ということにおいて、職業は中心課題の一つであるとしても、その範囲は『生きかた』全体へと広がるといえよう」と指摘し、あらゆる学習と活動のなかに自分の意志や認識や感情を自分自身で確定し表現することにより『『自分を選択する』』という契機」の価値を、まさに教育的価値の今日的な問い直しとして提起してきたのである。

こうした課題意識は、本学教育学コースで必修となっている卒業論文での、学生に対する乾さんの助言でも徹底されていた。自分自身をくぐらせながら、取り組むべきテーマと対象を探り出すプロセスを重視する乾さんの姿勢にゆらぎがなかったのは、こうした教育学研究のスタンスがその土台にあるからである。スキルの習得を求める声にひそむ教育的非価値性に対するリアルな分析があるのである。

いずれにしても、職業選択を既存の社会的分業に従属させるものとしてだけではなく、identity の確立という青年期の課題から職業分化を位置づけ返していくところに注目し続ける乾さんの青年期教育研究者としての視点は、教育学として引き継がれるべきものであるとわたしはとらえている。

後期近代における青年期の identity 形成をめぐる課題

「いま自分がぶつかっているしんどい問題が、自分の能力や努力不足のせいなのか、それとも自分以外のところに原因があるのかすら、一人では見分けづらくなっているのが現代という時代です。そこで少しでも身近なほかの人たちと、問題を共有していく方法を見つけだすことが、自分の問題を職場の問題や社会の問題につなげていく道筋だと思います」(307 頁)。

この引用は、『若者が働きはじめるとき―仕事、仲間、そして社会―』（日本図書センター、2012年）からのものである。この著作は、乾さんが担当されてきた教養科目としての授業で受講者がレポートしてくれたアルバイト体験、そして高校卒業者追跡調査で体験を語ってくれた対象者の方々から乾さんが教育学研究者として引き受けた成果と課題を、現代の若者に向けて語りかけたものである。

いつのことであっただけ忘れてしまったが、かつてわたしは、自分のことを棚に上げたまま生意気にも、1990年に出版された著作以降の、乾さんの identity 研究のその後の展開をぜひ出版してほしいと、乾さんの前でつぶやいたことがあった。ご本人はまったく覚えておられないと思うが、これは、乾さんの研究に関心をもってきた一人としての、本心からのことばであった。

実際には、2006年から立て続けに、乾さんは仕事をかたちになされてきているため、わたしの要望は実現したわけだが、一連の仕事を読ませていただき、乾さんから学ばせていただくことがつきないことを、あらためて痛感しているところである。

1977年に乾さんが書いた修士論文のテーマは「エリクソンの青年期のとらえ方とアイデンティティー青年期教育研究の方法論に関する一考察」である。思い起こせば、東京都立大学で修士論文を書こうとしていたわたしは、この修士論文のコピーを取り寄せて、仲間の院生とともに読んできた。その後も、乾さんの近くで仕事をすることができたことは、わたしにとって幸運であった。青年期における identity 形成研究から、企業社会と教育の関係分析を重ねられ、現在は、学校から社会への移行過程を精力的に研究されている乾さんの研究から、これからも学ばせてもらうつもりである。